

ジャズ界の巨匠

〜23〜

「ヤマハジャズクラブ」(YJC)は、ことし二十三年度外視した催し、という僕の年目を迎え、この秋に予定している「高柳昌行の世界」(仮題)で第百十七回となる。残念ながらすでに亡くなった、あの伊藤公治主任との二人三脚でスタートした僕らのクラブも、今では組織的にもきちんとして、多くの人たちの協力によって支えられている。

頭についてヤマハという名前前は、前回お話しした筈足當時のいきつから当然だが、現在ではヤマハホールをホームグラウンドとしているための名称で、企画、広報、運営などのすべては会員有志の自主的意欲にまかされている。つまり「ジャズファンによるジャズファンのためのコンサート」を開く愛好団体なのだ。このため十周年以後はスタッフ制とし、選ばれた熱心な会員の方々のボランティアの



レコードになった第98回コンサートで演奏する宮沢昭(右端)

活動により、あくまで営利を主眼とした催し、という僕の主張を徹底して頂いている。さらに僕らのコンサートは、本業のプロモーターやライブスポット(最近名古屋では「ラヴリー」「スターアイズ」「アートレイ」などが充実したスケジュールでファ

ンを楽しませている」とは、競合しないのが企画を考へる僕の基本姿勢なのだ。その意味で可能な限り既成のグループを選び、YJCのステージのために、臨時に編成したミュージシャンたちの集まりから生まれる音楽を發表してもらおうの趣旨として

宮沢のテナー ジャズ賞獲得

おり、結果的には東京でも聴けないユニークなジャズを鑑賞して頂いているのではないかなーなんて内心ちよっぴり自信もあるんだけど、図々しいかなあ。ともかく一度ぜひ聴いてほしいものですな。

じるのは、かつて胆石を手術したテナーの宮沢昭だ。戦後のジャズ界を引っ張ってきた宮沢さんも、口ぐせの「ジャズでは食えないからなあ」と一時、引退同様だった。手術後、わが家のスタジオでの練習で耳にした、人の心をゆさぶる音に感動して、ぜひとも、今一度、ジャズをやってほしいとお願ひした。

おつき合い以外に、本業に関係したジャズメンも多い。それが文筆家としても知られる山下洋輔の言う「オールスター愚者クラブ」だ。先年、佐藤允彦にアレンジを依頼して、渡辺貞夫を含む「サキソフォニックオーケストラ」をつくって、YJCで発表したが、その時、お話をうまい佐藤君が「きよつのお出演者のほとんどが岡崎の病院での入院経験者で、丈夫な僕は肩身がせまい」なんて笑わせていたけれど、「そういえばねえ」とびっくりしたものだ。

この作品は大きな反響を呼び、年間最優秀レコードに与えられる「日本ジャズ賞」を獲得して一同、手を取り合っで喜んだものだ。そして宮沢さんは今も名古屋を本拠にして、その豪快なテナーを鳴らし続けている。僕たちは、報われることを目的とはしないにしても、ミュージシャンとファンの心が通じ合うのは、何ですばらしいことか、ジャズを聴いてて良かったなあーそう考えて中でもひとときわ親しみを感

中(内田 修)